小学校社会科における多角的に考える授業作り

廣田　淳（教育実践コース）

1　自身の探究課題と実践で目指す社会科の授業

本章では自分自身の探究課題である「小学校社会科における多角的に考える授業作り」を設定した背景を述べる。

(1)　探究課題設定とその背景

現在の社会は AI 化やグローバル化などにより、予測が困難な時代となっている。こうした状況の中、学習指導要領は「このような時代にあって学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値に繋げること、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている」と記されている。私は学習指導要領の内容を踏まえ、一人一人の子どもが習得した知識を用いて、他者と協働しながら得た知識を今まで以上に理解し、これからの予測困難な時代に対応できる資質・能力を養う必要があると考え、そしてそうした子どもを育成するためには社会的事象を多角的に考える事が必要であると考えた。小学校学習指導要領の社会科編には「多角的に考える」を以下のように記されている。

> 「多角的に考える」とは，子どもが複数の立場や意見を踏まえて考えることを指している。小学校社会科では，学年が上がるにつれて徐々に多角的に考えることができるようになることを求めている。
> 小学校学習指導要領・社会科編
> （ 平成２９年度版 ）

上記のように私は複数の立場や意見を踏まえて考えることはこれからの予測困難な時代に対して必要な内容であると考えた。以上のことから私は探究課題を「小学校社会科における多角的に考える授業づくり」と設定し、２年間二つの実習校で実習に臨んだ。

(2)　多角的な考えを促す「対話」とは？

私は子どもたちが多角的に考える上で「対話」は必要であると考えた。なぜならば限られた時間の中で様々な情報を見極め、情報を再構成するには子ども一人の力だけでは難しいからである。実際に私は１年次前期の実習の中で社会科の授業を行った。その授業では対話の場面は設けず、調べ学習をさせた後、わかったことをノートに書かせた。すると子どもたちは他の人と情報を共有する機会がない場合、課題に対して多角的に考えることが難しいことが授業実践で判明した。この授業では調べた内容を発表する場面はあったが、ただ発表をするだけではその人の内容を聞いただけであり、その内容を加筆するということはほとんどの子どもが行っていなかった。私は実践の反省から実習校で行われていた対話を観察することにした。すると実習校では三つの対話が行われていることがわかった。

①社会的事象を一つの角度から話し合う。
②社会的事象を二つの角度から話し合う。
③社会的事象を複数の角度から話し合う。

それぞれの対話には特徴があり、①の対話では同じテーマでの対話であるため、子ども達同士で共感・進みやすいというメリットがある。しかしその一方で両者の間で社会的事象を複数の角度から考えることが難しく、見方・考え方が一面的になってしまうことが伺えた(図 1)。

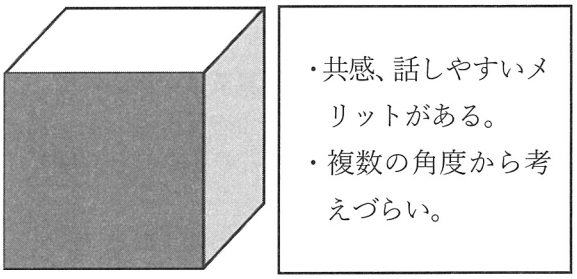

図１　社会的事象を一つの角度から話し合う

②の対話では二つの角度から対話が行われており、一見違うように思うような内容であっても、対話を通すことによって、実は全て繋がっていることに子どもたちは気づき、最終的には二つ角度から課題について考えることができる。しかしその一方で互いに調べた内容を共有する時間や手立てがない場合、対話が成り立たなくなり、学習者が調べた内容だけで課題を考えてしまうことが授業観察や自分の実践でわかった。(図２)

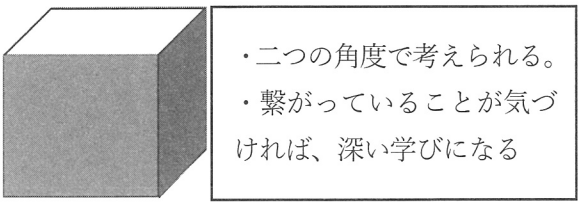

図２　社会的事象を二つの角度から話し合う

③の対話では複数の資料を用いて、社会的事象を様々な面から調べ、その角度から対話が行われていた。この対話は②と同様の特徴を持っており、深い学習に繋がり大変効果的であると考えた。（図３）

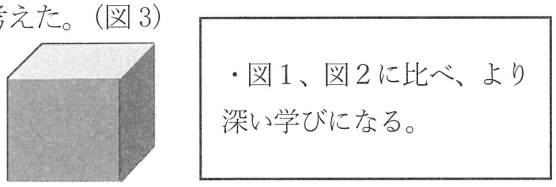

図３　社会的事象を複数の角度から話し合う

しかしその一方で②よりも対話が成り立つことが難しく、教師の手立てが重要であることがわかった。多角的に社会的事象を考える上で対話の②、③のタイプを行うことが重要であることが今回の分析でわかった。

２　多面的に知ることで多角的に考える

本章では１章の内容を踏まえ、１年次後期に実践した「多角的に考える授業」の理論と結果を述べる。

(1)　１年次後期の実践　「多面的に知る」

私は１年次の後期の実習で３年生の社会科「昔の道具とくらし」の実践を行った。ここでは「子どもが社会的事象を多面的に知ることができたら、多角的に考えることができる」と仮説を立て、実践を行った。本仮説は「多面的に知ること」が重要であると考え、子どもが社会的事象である「道具の変化」についての多面性を学ぶことができれば、自然にこれからの道具の変化について多角的に考えることができると考えた。子どもに「道具の変化」の多面性を知るために私は以下のような手立てを行った。

①道具を「体験」し、当時の人の生活を学ぶ。
②昔と今の道具を比較し、違いと特徴を知る。
③学んできたことを年表でまとめ、それぞれの道具について整理する。
④スマートフォンの購入者数をグラフで提示し、道具の変化には多面性があることに気づかせる。

実践では洗濯板を用いた洗濯を体験し、当時の人々の生活の様子や体験で使用する道具を使っていたときの心情を考えさせた。体験以外では昔の道具と現在の道具の使い方や特徴（大きさや見た目）などを比較し、道具の変化を捉えさせ、道具の変化の多面性を学ばせるようにした。①と②の手立てにより、子どもはそれぞれの道具の特徴や現在の道具との違い、そして当時の生活をしていた人たちはその道具をどのように使っていたのかを学ぶことができた。道具の体験と昔の道具と現在の道具を比較する手立てを終えた後、個々の道具と生活を年表で整理し、道具の変化には共通点があることを気づかせた。この手立ては年表などの視覚化により、共通点や関連している内容を整理することができていた。最後にスマートフォンの普及率をグラフで提示し、道具の変化には多面性があることに気づかせる手立てを行った。この手立てによって道具の変化は人や年齢によって違うことをグラフによって気づくことができた。以上の四つの手立てを用いて道具の変化には多面性があることに気づかせることにした。

以上のような手立てを終えた後、スマートフォンを数台紹介し、これからどのようなスマートフォンが発売されるのかを多角的に考える授業を実践した。しかし残念ながら多角的に考える子どもは数人しかいなかった。原因は手立ての内容の不足もあるが、一番は「子どもに多角的に考えることを「期待」していた」からである。私は多面的に知ることによって子どもは自然と多角的に考えることができると仮説を立てたが、それだけでは子どもは多角的に考えることができない。多角的に考えるための環境や状態をつくるだけではなく、多角的に考えるための手立てや働きかけによって「多角的に考えることを経験」させなければいけないことがわかった（図４）。

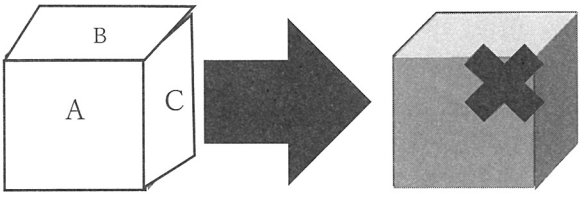

図４　多面的に知るだけでは多角的にならない

３　最初に予想を立て、視点毎にまとめさせる

本章では２年次後期の実習で行われた１次の「多角的に考える」の実践の理論と結果を述べる。

(1)　２年次後期の実践　「視点毎にまとめる」

２年次後期の実習で３年生の社会科「店で働く人の仕事」の実践を行った。その中の１次を多角的に考える授業として実践を行った。前の章では「多面的に知る」だけでは多角的に考えることはできないことがわかった。そこで今回は「子どもは最初に考えを持ち、そこから考えを共有、その考えを基に調べ学習を行い、その考えを視点毎に分けさせることで、多角的に考えることができる」と仮説を立て、多角的に考える子どもの姿を明確し、実践を行った。本次の多角的に考える子どもの姿は「スーパーマーケットの工夫を複数の角度(仕事や商品、並べ方など)から考える」とし、上記の仮説を基に以下の手立てを行った 。

①スーパーマーケットの利用者が多い理由を予想させ、全体で共有させる。

②スーパーマーケットのイラストからサービスを探させ、複数の予想をさせる。

③予想を基に実際にスーパーマーケットを見学し、見学して気づいたことを視点毎にワークシート書かせ、お店の工夫を理解させる。

④まとめた内容をスーパー毎に発表し、内容をグルーピングさせ、利用者が多い理由を多角的に考えさせる。

子どもたちの買い物調べカードの結果から「スーパーマーケットを利用する人は多い」という事実を認識させ、「なぜスーパーマーケットには沢山の人が利用するのか」と疑問に持たせた。そこから利用者が多い理由を予想させ、全体で共有(発表)させた。その後、教科書にあるイラストを用いて、新たな予想をさせた。その後、実際に三つのスーパーマーケットへ見学に行き、自分の立てた予想について確認を行い、自分の予想を視点へと変換させた。その後、グループになり、視点毎にワークシートに書かせた。最後にまとめた内容をスーパー毎に発表させ、利用者が多い理由をワークシートの内容を踏まえて考えさせた。手立ての結果、子どもたちの振り返りからはスーパーマーケットにある工夫を様々な視点から記述しており、ワークシートでは気づいたことや調べて分かったことを視点毎に分けて記述することができていた(図５)。

また本次の最後の発問「なぜスーパーマーケットはこのような工夫をするのか」という発問に対し、「お客にもっときて欲しい」や「いっぱいのお客さんが来ても安全なように」などの解答も来ていた。以上のことから私は本次では子どもたちの多角的な見方・考え方を養うことができ、多角的に考える子どもを育成できたと判断をした。

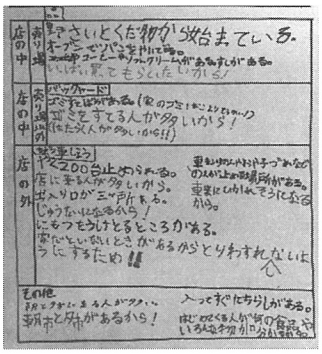

図５　児童が記述したワークシート

４　実物を提示し、多角的な意見を視覚化する

本章では２年次後期の実習で行われた２次の「多角的に考える」の実践の理論と結果を述べる。

(1)　２年次後期の実践　「視点の可視化」

本実践は２年目後期の実習の「店ではたらく人の仕事」の２次で「多角的に考える」の実践を行った。本実践では「最初に子どもが考えを持ち、その考えを視点毎に黒板に板書し、その板書の内容を意識させることで多角的に考えることができる」と仮説を立て、実践を行った。以下がその手立てである。

①３種類の実物のバナナから購入したい商品を考えさせ、意見を書かせる。

②黒板の視覚化を用いて全体で共有させ、教科書を使って消費者の視点を学習させる。

③３種類のバナナから購入したい物を再度考えさせる。

実践では子どもたちに三つのバナナを紹介した。それぞれ値段、本数、味や長さなどが異なるバナナを提示し、「親から買い物を任せられた場合、どのバナナを購入するか」と子どもたちに発問した。その後子どもたちに選んだバナナと理由を書かせ、共有させた。共有の時は視点毎に分け板書を行い、様々な視点から商品を選んでいることに気づかせた(図６)。

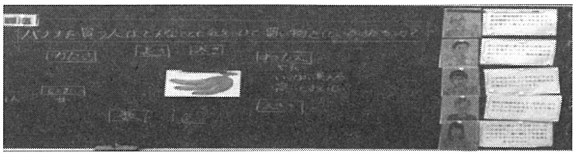

図6　実際の授業で行った板書

その後教科書に書かれてある視点を紹介し、商品(や店)を選ぶときの視点を増やした。その後、今までの視点を踏まえ、改めて購入したい物を再度選ばせ、理由を書かせるという授業を行った。以上の内容から４つの子どもの姿が出てきた。

①多角的に考え、商品を変えなかった。11 人。
②多角的に考え、商品を変えた。11 人。
③多角的に考えず、商品を変えない。3　人。
④多角的に考えず、商品を変えた。　1 人

結果、多角的に考えている子どもは合計で 22 人と半数以上いることが分かった。一方多角的に考えていない子どもは合計で４人いることがわかった。このことから子どもは最初に考えを持ち、そこから考えを共有、その考えを基に調べ学習を行い、その考えを視点毎に分けさせることは多角的な見方・考え方を養い、多角的に考える子どもを育成できたと判断した。しかしこれは全員が多角的に考えているわけではなく、手立ての一部を修正する必要があると考えた。

５　２年間の総括

本章ではこれまでの２年間の実践を通して学んだことをまとめる。

(1)　多角的に考えることについて

私はこれまで多角的に考える子どもの実現のために社会科の実践を幾つか行った。そこから子どもが多角的に考えるためには、以下の手立て(指導)が重要であることが分かった。

①子どもが社会的事象を多面的に知っただけでは自然に多角的に考えるわけではない。
②子どもが課題(や疑問)に対して自分の予想(や考え)を持つことが重要である。
③調べた、学んだ内容を視点毎に分けさせ、まとめさせることで多角的な見方・考え方を養うことができる。
④他者の意見を黒板に板書し、意識させることで多角的に考えやすくなることができる。

多角的に考えることは学年が上がる毎に徐々にできることが求められている。しかし３年生の子どもに社会的事象を多面的に学習させるだけでは多角的に考える事は難しく、実現は難しいことがわかった。だからこそそうした多角的に考える状況や環境を作り、教師が期待をするのではなく、子どもが多角的に考えることを経験できるような手立てや働きかけをしなければいけないことがわかった。

子どもに多角的に考えさせることを経験させるためには「最初に自分の考えを持つこと」と「視点を分けながら、まとめさせること」そして「自分以外の視点を黒板などで視覚化させ、意識をさせること」が重要であることがわかった。子どもが社会的事象に関する疑問や課題に対して自分の考え(や予想)を持つことは、その後の活動に軸があり円滑に活動をすることが出来るだけではなく、その視点から既に考えており、別の視点から考えている他者の考え(や予想)を共有することで最低でも二つ以上の複数の角度を子どもは知ることができる。その後教師の手立てによって、別の視点を意識できる、視点毎に分けさせる手立てを行うことによって子どもは多角的に考えることを経験することができることが分かった。

その一方で子ども自身が他の考えた視点を「知りたい」という意識がないと共有の場があったとしても効果が薄いことが実践の中でわかった。また黒板やワークシートなどを用いて視点を意識させる、視点毎に分けさせるようにすることは効果的であることが実践で判明したが、具体的な板書の方法、ワークシートの作成方法については検証することができなかったため、今後の教員生活の中で調べていきたいと感じた。

(2)　今後の展望

以上、教職大学院における学びを述べてきた。この２年間、探究課題「小学校社会科における多角的に考える授業作り」だけではなく、基本的な小学校社会科の授業の流れや現在の教育における「主体的」や「対話的」の重要性、社会科だけでなく、他の教科なども実践をすることができ、複数の角度から授業方法や理論について学びを深めてきた。そして何より多角的に考える為には何が重要か、学習者にどのような手立てを行えば良いのかなど、多角的に考える授業の実現に大きく近づくことができたと感じた。しかし未だ探究課題を完遂していない点や教員として授業技術不足な点などが存在していることも事実である。今後の教員生活を通して、まだ不足している検証を行い、今後も研修を積み重ね、自分の不足している内容と技術を増やしていき、自己の成長をさせ、探究課題と教師としての技量を高めていきたいと改めて強く感じた。